

コロナ危機(COVID-19)に考える

変わるもの、変わらないもの (おそらく最後の) ミャンマー出張を中心に

福田 幸正

グローバル・グループ 21 ジャパン

コロナ危機は進行中ということもあり、まだ、まとまった考えはないが、昨年 11 月のコロナ危機が始まる直前のミャンマー出張を中心に、ステイホーム中に思ったことなどを書き留めておこうと思う。

ミャンマーで思ったこと

当初は今年の 2 月にミャンマーに 1 カ月間、業務出張する予定だったが、急遽前倒して昨年 10 月末に出張に行くことになり、11 月末に帰国した。その直後からミャンマーもコロナ危機に見舞われたので、当初の予定通りだったらミャンマー入りはキャンセルになっていたはずだ。このように自分はたまたま混乱に巻き込まれずにすんだが、コロナ感染を避けるために急遽帰国を強いられたり、今でも現地に踏みとどまっている仲間たちがいることを忘れてはならない。同時に、そのような先進国側の一挙一動を途上国側はじっと見ていることも想起すべきだ。そして、われわれが一斉に現地から退避したあとに、プロジェクトは滞るのだろうか。それとも、案外われわれがいなくても（必要に迫られて）物事はまわっていくのだろうか。先進国の不在が途上国の自助努力を促すのであれば、それに越したことはないはずだが。相手がいなくなって初めて相手の真価やこれまでの関係について気づかされるもの。コロナ危機は図らずも先進国側と途上国側の双方にとって、このような気づきの機会になるものと思われる（先進国側が気づくことの方が多様な気がするが）。

しかし、直接のコンタクトを絶たれて、生身の人間同士の血の通った協力関係は成り立つのだろうか（そのようなことは求めないのなら、話は別）。また、テレビ会議にも限界があろう（テレビ会議ですむ内容で良しとするのなら、それも話は別）。特に技術移転には、時間をかけた対面、手取り足取りの指導といった人の要素が欠かせない。既に信頼関係が出来上がっている場合にはテレビ会議であっても意思疎通は成り立つが、これまで面識のない者同士がいきなり新規事業に取り組むことには無理がある。しかし、そもそも良い事業というものは、コロナ危機があろうとなかろうと、なんとかうまく進んでいくものではないだろうか（筋の悪い事業は、何をやってもだめだろうが）。コロナ危機で余計な介入も入りにくくなれば、優良事業が残るはずだ。この際、ことが納まるところに納まるのを見届けてみたいものだ。「そんな悠長なことは言っていられない。人々に寄り添う援助はままならないし、国際協力自体、不要不急とされかねず、風前の灯火なのですぞ！」とお叱りを受けそうだが、少なくとも今の日本の国際協力コミュニティからは、そんな危機感は伝わってこない。

— —

昨年 11 月のミャンマー出張は一年ぶりだったが、前回に比べると急激に中国人観光客が増えていたことに驚いた。中国とは地続きのミャンマー。怒涛のように押し寄せて来る中国の勢いを目の当たりにすると、さしもの親日国ミャンマーも変節するのではないかと心配になる。だからという訳ではないが、自分は海外に行った際には、仕事の相手とは別に、出張者として必ずお世話になる現地の人々との交流を大切に、また、楽しみにもしている。つまり運転手さんやホテルの従業員などの庶民だ。今回のミャンマー出張で出会った人々とのエピソードを披露したい。



運転手さんと大衆食堂で昼食

一件目は運転手さんとのエピソード。今回のミャンマー出張では、この日しか空いていないという関係者へのインタビューのために、休日ではあったが一日車を借り上げた。運転手さんはまだあどけなさを残すビルマ青年。片言の英語で、結婚 3 年目、子供はまだいない、などなど、かなり身の上を語ってくれた。仕事を終わると昼時になっていたの、こちらから無理に誘って運転手さんの行きつけの大衆食堂で昼食を共にした。そのあと、ヤンゴン

市内をゆっくりドライブしてもらってホテルに戻ると、まだ午後 3 時。夜まで車を借り上げることもできたが、その晩は満月のお祭り。” Love your wife.” と言って借り上げ終了とした。運転手さんは大喜びで若妻のもとに帰っていった（その直後から帰国までの間、激しい下痢に見舞われた。おそらく昼食の水牛カレーの油があわなかったのだろう）。それはともかく、いまなおミャンマーは（他の国も）コロナ危機の影響で業務スケジュールの目途が立たない。途上国と濃厚接触することを生業とする者にとっては死活問題だ。

二件目は、ホテル従業員とのエピソード。ミャンマー出張最後の夜、ホテルのカウンターにいて支払いを済ませた。翌日の出発が早朝だからだ。部屋に戻ろうとすると、支配人が自分を呼び止めた。「朝食はどうかございますか。少し早めにレストランを開けておきましょう。」自分は朝食抜きで出発するつもりだったが、ありがたく支配人のオファーを受けることにした。翌朝、レストランは普段より早く開店していたが、(案の定)ビュッフェは準備中だった。車が早めに迎えに来ていたので、お茶だけいただいて出ることにした。いつも給仕してくれた若いウエートレス長にお別れの挨拶をと思ったが、見当たらないので厨房に行ってみた。玉ねぎが積みあがった薄暗い厨房の隅で、ブレザー姿のままで彼女は卵を焼いていた。自分がお別れを告げると、「もうすぐできるのに」とちょっと悲しそうな顔をしたが、次の瞬間満面の笑みで見送ってくれた。こちらも「今度来たら、また two eggs, both sides でお願いしますよ」と返した。空港に向かう車窓から朝日が当たり出したシャンの山なみをぼんやり眺めながら、はじめて気がついた。「コックに調理させず、毎朝毎朝、注文もしていないのに卵焼きをこさえてくれたのは、彼女自身だったのだ」と。民主化以降、ミャンマーはアジア最後のフロンティアなどと持ち上げられ、伝統社会にも急速に変化の波が押し寄せている。ミャンマーの人々が開

発の代償として、こんなさやかなやさしささえも見失うことがないことを願ってやまない。

— —



ウタント・ハウス（ヤンゴン 福田 撮影）

業務を通してせっかくミャンマーと袖触れ合うことができたのだから、もっとかの国のことを知りたいと思い、ステイホーム中に、浅沼先生ご推薦のタンミンウー（Thant Myint-U）の近著 *The Hidden History of Burma Race, Capitalism and the Crisis of Democracy in the 21st Century*, 2019²を読んだ。タンミンウーはミャンマー人の歴史研究家。ウタント国連事務総長の孫にあたる。国連勤務などを経て、現在はヤンゴン在住。ウタント・ハウス（ウタント事務

総長の生前の住居。今はウタント事務総長の業績を偲ぶ博物館）や Yangon Heritage Trust（ヤンゴンの歴史的建築物の保存団体）を主宰しているとのこと。昨年 11 月ミャンマーに出張した際、ヤンゴンに残る英国植民地時代の建物を見て回った。そして、ストランド・ホテルに立ち寄った際に閑静な古い住宅街の中にある骨董屋を紹介してもらった。行ってみるとそこには相当価値のありそうな仏像、仏具が所せましと陳列されていたが、自分は目利きができないので、店主とよもやま話で時間をつぶすことにした。ふとカウンターにウタント事務総長のポートレートを装丁した伝記があることに気づくと、店主は、近くにウタント・ハウスがあるというので、立ち寄ることにした。あいにく休日で閉館中だったが、気のよさそうな若い門番が、せっかくやってきた外国人を気の毒に思ったのか、門を開けて敷地内を案内してくれた。緑に囲まれた静かな庭をゆっくり一周し、そして最後に館を振り返り、ミャンマーのそしてアジアが誇る外交官に最敬礼してウタント・ハウスを後にした。タンミンウーと、その近著のことを知ったのは帰国後のことだった。

タンミンウーは、ミャンマーの近代史を叙事詩のように流れるように語っているのだが、多民族からなる国の国づくりの難しさをテーマとした重たい内容の本だ³。感想の整理

¹ 福田幸正「ミャンマーからの絵葉書：ウエートレス長の卵焼き」、SRID Newsletter 2020 年 3 月号から抜粋

² タンミンウー、CSIS での出版記念講演、2019/11/20
https://www.youtube.com/watch?v=4_EhKWaHThU

³ 参考：ビルマ王家の末裔を取材したドキュメンタリー、Burma's Lost Royals, Timeline, 2020/05/16（タンミンウーもコメンテーターとして出演）
https://www.youtube.com/watch?v=BWFOr47_dao

がつかないまま悶々としていたら、コロナで一カ月間休館していた図書館から予約していたことを忘れていた本が届いた（緊急事態宣言の解除で、しみじみ図書館のありがたさを感じた）。コロナに関連して新聞で紹介されていたジェームズ・C・スコットの『ゾビア 脱国家の世界史』（佐藤仁 翻訳監修〔2013〕）（原題 *The Art of Not Being Governed An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, 2009）⁴。なにげなく「はじめに」をめくっていると、数多く名を連ねる謝辞の対象者の中に、なんとタンミンウーの名前があるではないか。それにこの本は、コロナなどの疫病を主題としたものではなく、東南アジアの中でもとくにビルマの山地民に焦点を置いた無国家空間をあつかったものだった。タンミンウーの本をより理解するうえで必要と直感し、読み始めたところだが、なにか不思議な糸に手繰り寄せられてこの本に辿り着いたような気がする。二段組の分厚い本なので、完読するまでに相当時間がかかりそうだが、タンミンウーの本と併せ、何らかの形で感想をまとめようと思っている。そして、ミャンマーで自分は大きく役に立てなかったことに悔いが残るからこそ、いつの日かコロナが収束したら、またミャンマーに行ってみたいという気持ちをあらためて募らせている。この歳にもなると、思い残すことを一つ一つ減らしていくことがこよなく大切なことのように思われる。

ロックダウン・ダイアリー

- SRID 新年会があったのは、1月27日。今となってははるか昔の出来事のような気がする。その場ではコロナは話題に出たが、どこか対岸の火事のような受け止められ方だったと記憶している。自分は順が回ってきた挨拶で、コロナによって先進国が大きく毀損するのに対して、途上国のコーピング能力が際立つのではないかと発言したが、深く考えたものではなかった。新年会の直後から、インターネット上にあらわれた武漢の惨状をとらえた映像にただならぬものを感じ、恐怖を実感し始めた。新年会から2日後の1月29日に義理で行かなければならないセミナーが都心であった。躊躇したが、セミナーの終了間際に会場に行ってみると、閑古鳥が鳴いていると思いきや、広い会場は満席になってることに大変驚いた。自分は早々に退散したが、このようにそのころまでは、一般の危機意識は低かったと思う。そして、2月以降、次のような出来事を経て、日本中はコロナ一色となっていった。ダイヤモンド・プリンセス号の横浜港入港（2月5日）、国内初の死者確認（2月13日）、首相による臨時休校要請（2月27日）、WHO パンデミック認定（3月12日）、都知事による週末外出自粛要請（3月25日）、緊急事態宣言（4月7日）、緊急事態宣言解除（5月25日）。
- 自分は3年前に再再就職して以来、自宅勤務。また、家族ともども長年ミニマルな生活を送ってきたので、「ステイホーム」、「テレワーク」、「不要不急の外出は控えること」といった「新たな日常」は、日常だ。変化はせいぜい、外出の際にマスクをかけることと、ソーシャルディスタンスを心掛けることくらい。とはいえ、いまだに予防ワクチンのないコロナ。今年からハイリスク世代の仲間入りした自分にと

⁴ スコット教授とのQ&A、イェール大学、2010/11/04
<https://www.youtube.com/watch?v=aVwrUsib4vU>

っては恐怖だ。米国の報道で（PBS NEWSHOUR、2020年4月1日）、留学先の英国から本国の台湾に退避する女子大生のエピソードがとりあげられていた⁵。その中で、スマホが命綱になっていることに愕然とし、大変遅まきながら、家内ともども10年使い続けたガラ携からスマホへの乗り換えを即断した。どちらか（あるいは、両方）が隔離されるような最悪の事態を恐れてのことだ（これは家内には言っていない）。スマホ購入で得られた安心感は大きなものがあった（家内は妹とのLineがあらたな楽しみになったようだが）。

- スマホ購入で心の余裕ができたこともあり、海外の友にメールでコンタクトしてみた。幸い皆達者で過ごしているようだった。これまで英文レターやメールの結び言葉は、**I wish to maintain close contact with you in the future** と、決まり文句を書いてきたが、今回は、**close contact** に格別な意味を感じる。そこで、**real** を **close contact** の前に書き加えた。友との再会はいつ実現できるのだろうか。

心の余裕をもう一つ。マスク不足が深刻だ。マスクがなければ自分で作ればいい（作ってもらえばいい）。家内にせつについてブランド物だが使い古したハンカチをマスクに作り替えてもらった。トイレットペーパーだって、いよいよなくなればなんとかなる（揉んだ新聞紙を使うとか、水で洗うとか）。



自家製マスク

- この雑感を書き終えようとしていたら、白人警官による黒人暴行殺人事件（5月25日）に端を発して全米で一気に抗議デモが勃発した。コロナによって10万人を超す死者を出している米国。それも火に油を注いでいるのだろう。そんな中でも白人警官の中には勇気をもってデモに連帯を示す者が出てきていることは驚きだし、またそこに希望が持てる。とにかく事態の展開は早く、オバマがなしえなかった**Change** を乗り越えていきそうな成り行きだ。米国デモの中心になっているのは、**Generation Z**（Z世代）とよばれる1990年代半ばから2000年代前半生まれの若い世代だ。Z世代の特徴はSNSを使いこなせること、環境問題への強い関心、リーマンショックによる親の経済難を目の当たりにしてきたことなどがあげられているが、コロナ危機と人種差別反対デモのなかで、まとまった時間、社会の在り方について深く考える機会を持ったこともその特徴にあらたに加わることだろう。日本の同世代といえ、1990年代初頭にバブルがはじけて以来、「失われた30年」の中で生きてきたことになる。各国の事情はそれぞれ違うだろうが、世界中の同世代の若者たちは世界同時コロナ危機の中で沈黙考したはずだ。コロナにやられなくとも、いずれハイリスク世代から順にフェーズアウトして世代交代していく。コ

⁵ 台湾の積極的なコロナ対策、PBS NEWSHOUR, 2020/04/01

<https://www.pbs.org/newshour/show/taiwans-aggressive-efforts-are-paying-off-in-fight-against-covid-19>

コロナ危機を生きる今の多感な世代にバトンが渡されたとき（コロナ危機は世代交代を早めるかもしれない）、彼らはどのような世界を築いていくのだろうか。

【番外】最近、外国人が見た日本のサラリーマンのアフター・ファイブをあつかったビデオを見つけた⁶。このシリーズは一見コメディ風の観光番組だが、世界の様々な食文化にどっぷり浸かり、そして現地の人たちと一緒に楽しもうとするスタンスには好感が持てる。ネオン、赤ちょうちん、屋台・・・とにかくこのビデオを観ていると、おそらく二度と再び戻ってくることはないであろうコロナ前のあのばかばかしい日々が、たまらなく愛おしい。

⁶ Bizarre Japanese Bar Food and the Secret Nightlife of Tokyo's Salarymen!
Best Ever Food Review Show, 2019/01/20
<https://www.youtube.com/watch?v=hLLkZsyjn-M>